

英語力の醸成に係る学部 — 大学院の積極的な連携と研究力の強化

生命環境学部 萩 田 信二郎

はじめに

例えば、学術論文から必要な情報を調べることに、試薬や分析機器の説明書を正しく理解して使用すること、得られた研究成果を研究室や学会等で発表すること、これらは生命や環境に関する学修・研究に取り組む学生諸子には積極的に実践してもらいたいテーマであり、そのためには相応の英語力が求められる。また、大学院生のみならず学部生であっても、研究活動やコミュニケーションで英語を活用する場面は増えており、庄原キャンパスに所属する学生にとって「英語力」は欠かせないスキルであるといえよう。

このような中、生命環境学部と生命システム科学専攻では、平成29年度県立広島大学FD活動促進事業「英語力の醸成に係る学部－大学院の積極的な連携と研究力の強化」において、英語活用体系の充実や改善を図るために、1) 大学院生等を対象にしたTOEICスコア等のサンプル収集と解析、2) 他大学におけるTOEIC等スコアの活用事例の調査、3) 国際交流に関する現状と将来像の検討の各取組みを実施した。本稿ではそれらの取組みの概要と成果を紹介したい。

1) 大学院生等を対象にしたTOEICスコア等のサンプル収集と解析

平成29年度の大学院進学希望者（学部4年生）を対象に実施した「TOEIC等の英語資格に関する説明会」（平成29年10月19日実施）には、その時点での進学希望者（20名）の85%に当たる17名が参加しており、英語資格に対する関心の高さが伺えた。同時に実施したアンケートで、自身のTOEICスコアと目標スコアを確認したところ（図1）、現在のスコアより200～250点高い500～700点を目標に挙げる学生が多かった。その目標スコアの理由を問う自由記述では、1名が現在取り組んでいる研究に関連した理由を挙げたのに対して、複数の進学希望者からは自身のキャリアや進路のために一定以上のスコアを取得した方が良いという意識が伺えた（表1）。これらの目標スコアに関する意識については、今後TOEICに係る支援等を進める上で考慮していく必要がある。なお、今後の大学院入試におけるTOEIC等スコアの活用について確認したところ、17名中11名から「活用は望ましい（問題ない）」、1名から「どちらかという望ましい」という回答を得ており、全体の70.6%の進学希望者が大学院入試での活用は「望ましい」という認識であった。

後日、同じ進学希望者20名に対して、TOEIC-IPテストの学内受験（受験料全額補助にて平成29年12月1日・2日実施）の機会を提供したところ、13名（平成30年度修士1年生）が受験した（受験率65%）。このTOEIC-IPテストには14名が申し込み、都合により1名が欠席した。また非受験者のうち4名は、TOEIC公開テストの受験希望者であることが把握できており、潜在的には90%（18

名)の進学希望者がTOEICスコアの取得を志していると判断できた。さらに、今回の受験者13名の各スコア平均点を見ると、Listeningスコア231点、Readingスコア176点、Totalスコア407点(最低275点、最高585点)であり、自身が目標とするスコアを達成するためには、継続的な学習や受験への動機づけ、スコア向上に向けた取組み等の新たなサポートは必要であり、その構築に注力すべきであると確信した。

なお、モニターとして在学大学院生(平成30年度修士2年生)についても希望者を募ったところ、在学大学院生23名中6名が同TOEIC-IPテストを受験した(受験率26.0%)。受験者6名の各スコア平均点を見ると、Listeningスコア244点、Readingスコア161点、Totalスコア405点(最低320点、最高505点)であり、学年によるスコアの差異は認められなかった。参考までに、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC: The Institute for International Business Communication, <https://www.iibc-global.org/toEIC.html>)から公開されているData & Analysis 2017のTOEIC全国平均スコアは、Listeningスコア251点、Readingスコア193点、Totalスコア444点(大学)、Listeningスコア285点、Readingスコア231点、Totalスコア516点(大学院)であった。

これらの結果を踏まえて、次年度も引き続き、学部並びに大学院の研究・教育環境整備のためにTOEIC対策等には注力していく必要があると考えている。なお、本事業では支援の一環として英語学習教材を整備した。この教材については、平成30年度重点事業「研究・教育環境の国際化推進をコアとした大学院の質的改革に資するプログラムの構築(生命システム科学専攻)」に引き継ぎ、有効活用を図っている。

2) 他大学におけるTOEIC等スコアの活用事例の調査

本FD活動促進事業のサポート及び「平成29年度JSPS外国人招へい研究者(短期)事業」等を活用して、生命環境分野の国公立大学4校(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科、富山県立大学大学院生物工学専攻、石川県立大学大学院生物資源環境学研究科、京都大学生存圏研究所森林圏遺伝子統御分野)及び私立大学2校(東洋大学生命科学部応用生物科学科、岡山理科大学理学部)を訪問等により、学部・大学院の英語教育や大学院入試におけるTOEICスコア等の活用実態や留学生受入に関する聞き取り調査を実施し、詳細な情報を得た。大学院への内部進学率が6割超程度なのか2割程度なのか、また留学生等の受入状況等、各大学の基礎的状況の差異は考慮すべきであるが、それぞれの大学で一般選抜や社会人特別選抜、外国人特別選抜に公開スコアを活用していた。なお、本専攻と同様の研究分野(生産科学、環境科学、食品科学、応用生命科学の4分野)を有し、同規模の入学定員(8名×4分野で32名)を擁する大学院である石川県立大学大学院生物資源環境学研究科では、推薦入試の選抜にも公開スコアを活用しており、聞き取り内容も含めて大変参考になる事例であった。さらにTOEIC-IPスコアの大学院入試への活用事例や、推薦入試での活用(出願要件または合格判定基準の一部)についてもIIBCで公開されている資料を元に抽出調査を行い(表2)、調査結果の詳細は、学部-専攻の教務・入試委員会での審議等に活用している(https://www.iibc-global.org/toEIC/official_data/lr/search_daigakuin.html)。

3) 国際交流に関する現状と将来像の検討

冒頭で、生命や環境に関する学修・研究に取り組む学生諸子に積極的に実践してもらいたいテーマを挙げたが、受入留学生との研究室内等での国際交流は、極めて効果的な実践の場の一つである。生命環境学部と生命システム科学専攻では、現在イングリッシュトラック（ET）入学選抜制度や大学院外国人特別選抜入試制度、交換留学生や研究生の受入制度等により長短期の留学生受入促進を進めているところである。このような中で、本FD活動促進事業では、「FD講演会」として、庄原キャンパスの第一会議室を主会場とし広島キャンパスと三原キャンパスを遠隔受信として、国際交流や留学生受入に関して最新の情報を共有する場を開催した。まず、国立大学法人大阪大学生物工学国際交流センター准教授の木谷茂先生をお招きして、「大阪大学生物工学国際交流センターの事例について」講演していただいた（図2）。大阪大学生物工学国際交流センターは、バイオテクノロジー分野で国際的視野に立って教育と研究を行いつつ、周辺諸国との学術交流を推進し、本分野における教育と研究並びに国際交流におけるアジアの拠点たることを目指しており、多くの留学生受入と日本人学生との国際交流を実践している。中でも教員が長期間現地に赴き、協定校との高度な交流基盤を形成している点、また、複数の留学生と日本人学生が研究室に所属することで英語による日常的なコミュニケーションが活性化している点等、紹介された事例やノウハウは非常に興味深いものであった。続いて本学の森永力国際交流センター長の講演では、「県立広島大学国際交流の現状と課題」について、本学の協定校数や受入実績を交えた詳細な説明がなされた。なお当日の参加者は20名（庄原キャンパス：10名、広島・三原キャンパス：10名）であったが、本講演会の様子は、ビデオ撮影・DVD記録しており、常時活用できるよう整備した。

一方、国際交流に関する将来像については、本事業で得た各種情報等を有効的に活用しつつ、生命環境学部等国際交流委員会や、大学院生命システム科学専攻教務・入試委員会等で議論し、具体的な対応を進めていきたい。

おわりに

本FD活動促進事業の実施に関してTOEICや大学院入試のヒアリングにご協力いただいた各大学の先生方（敬称略）、並びに講演会の講師をご快諾いただいた先生方（敬称略）に厚くお礼申し上げます。また、TOEIC-IP実施や調査に参画、サポートいただいた本学教職員の皆様並びに学生諸子にも謝意を表します。

現在、本FD活動促進事業の成果は、本学の平成30年度重点事業「研究・教育環境の国際化推進をコアとした大学院の質的改革に資するプログラムの構築（生命システム科学専攻）」において、(1) TOEICテスト受験料助成：学内TOEIC-IP受験助成、(2) 英語力向上学習機器の無償貸与：3ヶ月程度貸与＋受験プランを提示と実施、(3) 国際学会等研究活動特別支援の各取組みに反映し、さらなる展開をめざしております。今後も英語力の醸成に係る種々の取組みの企画と実施に努めたいと思います。

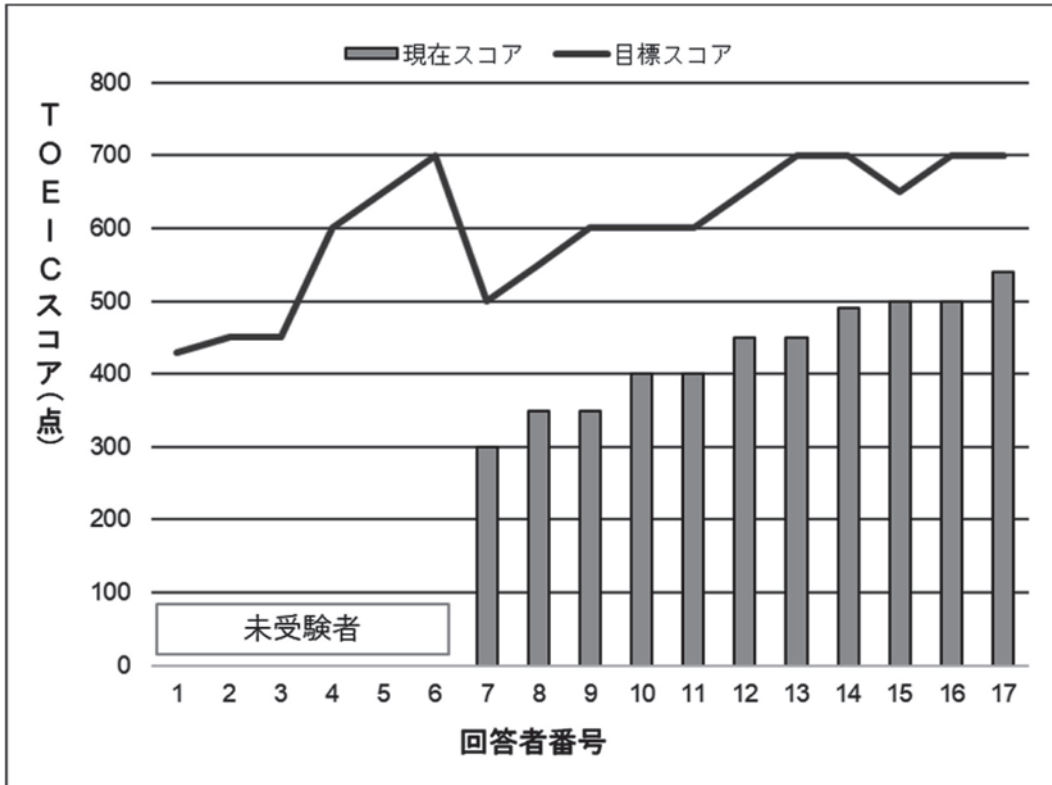


図1 TOEICスコアアンケート結果1：現スコアと目標スコアの比較



図2 FD講演会の様子（平成29年11月17日に実施）

表1 TOEICスコアアンケート結果2：目標スコアを掲げた理由

目標スコア	理由
430	学部4年時の平均スコア?のようなので。
450	最低限のコミュニケーションを取りたいから。
450	何点が適しているのか分からないが、意志疎通できれば良いかな…
500	平均点あたりが望ましいと考えているため。
550	スライドの新入社員500点以上、自分が取った350点より200点上。
600	姉が取っていたスコアに近づきたいから。
600	就職活動で使えるから。
600	企業が求めるボーダーラインだから。
600	履歴書等に記入できるから。
650	先輩の助言により、これぐらいはあったほうがよいと
700	論文を読む機会が多いから。将来、就職したときに外国の人と英語でコミュニケーションをとる可能性があるから。
700	目標は高く持ちたいから。
700	履歴書に書ける程度の点だから。
700	社会で十分アピールできると思うから。
700	就職でも活用できるため。

表2 生命環境分野の大学院入試におけるTOEICスコア活用状況

区分	大学院	研究科・専攻・コース	課程					試験形態	活用方法	基準スコア	公開テスト	IPテスト
			修士 博士前期	博士後期 一言制博士	一般 入試	社会人 特選	外国人 特選					
国公立	三重大学大学院	生物資源学研究科	◎	○	○			出願要件の一部	400	○	○	
			◎	○				出願要件の一部	-	○	○	
	金沢大学大学院	自然科学研究科	◎		○		○	合否判定基準の一部	-	○	／	
	京都大学大学院	地球環境学舎(地球環境学専攻)		◎	○	○		合否判定基準の一部	-	○	／	
	大阪大学大学院	生命機能研究科	◎	◎	○			合否判定基準の一部	550	○	／	
			◎				○	合否判定基準の一部	-	○	／	
	大阪府立大学大学院*	生命環境科学研究科	◎		○	○		出願要件の一部	-	○	／	
			◎	◎	○	○	○	出願要件の一部	-	○	○	
	岡山大学大学院	環境生命科学研究科 (資源循環学専攻・循環型社会形成学講座)	◎		○			出願要件の一部	-	○	○	
			◎		○			出願要件の一部	-	○	○	
			◎		○			出願要件の一部	-	○	○	
			◎		○			出願要件の一部	-	○	○	
			◎		○			出願要件の一部	-	○	○	
	広島大学大学院	理学研究科(生物学専攻)	◎		○		○	出願要件の一部	400	○	○	
	九州大学大学院	システム生命科学府(システム生命科学専攻)		◎	○			合否判定基準の一部	-	○	○	
	九州工業大学大学院	生命体工学研究科(生体機能応用工学専攻)	◎		○			出願要件の一部	-	○	／	
熊本大学大学院	自然科学研究科	◎				○	合否判定基準の一部	-	○	○		
		◎		○	○		合否判定基準の一部	-	○	／		
私立	国際基督教大学大学院	アーツ・サイエンス研究科	◎	◎	○			出願要件の一部	-	○	／	
			◎		○			合否判定基準の一部	-	○	○	
	東京理科大学大学院	理工学研究科(応用生物学専攻)	◎		○			合否判定基準の一部	-	○	○	
	法政大学大学院	理工学研究科	◎	◎	○			合否判定基準の一部	-	○	○	
	早稲田大学大学院	先進理工学研究科	◎		○		○	出願要件の一部	-	○	／	
			◎	◎	○		○	出願要件の一部	-	○	／	
			◎	◎	○			出願要件の一部	-	○	／	
	立命館大学大学院	生命科学研究科	◎		○		○	出願要件の一部	-	○	○(条件付)	
			◎	◎	○			出願要件の一部	-	○	○(条件付)	
	関西大学大学院	理工学研究科(化学生命工学専攻 生命・生物工学分野)	◎		○			出願要件の一部	-	○	／	

※ IIBC 公開データ2017 から抜粋